第５章　総 括

別府において６世紀後葉から７世紀初頭にかけて大分県内最大規模の大型横穴式石室墳を構築する実相寺古墳群と鬼ノ岩屋古墳群を、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群と総称し、発掘調査から得られた成果をもとに検討を行い総括調査報告書のまとめとしたい。

第１節　鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の調査成果

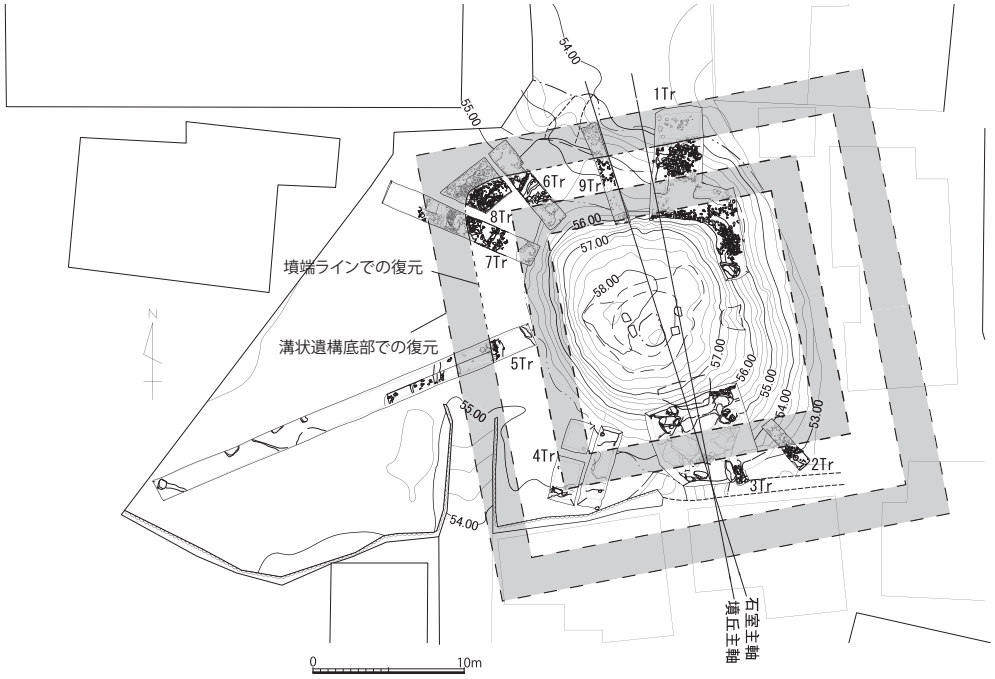
１　鷹塚古墳（第 97 図）

鷹塚古墳は、平成 20（2008）年度～ 23（2011）年度にかけて墳丘の周囲に９箇所のトレンチを設定して調査が行われた。この古墳は、従来円墳と想定されてきたが、５・７トレンチでは墳端と考えられる南北方向の列石が確認され、墳丘の北西部に設定された６・７・８トレンチで確認された墳端の列石が隅丸状のコーナーを呈していることから、鷹塚古墳が方墳であることが確認された。５トレンチでは列石の外側に溝状遺構が確認され、尾根から墳丘基底部を方形に削り出すための遺構であると考えられる。

墳丘規模については、現状においては１つのコーナーと２つの直線しか確認されていないため推測の域を出ないが、確認された墳端の列石を結び、これを墳丘主軸で反転させると１辺 25m 程度の方墳になるものと考えられる。

墳丘構造は２段築成になるものと考えられ、墳丘の北側に設定した９トレンチにおいて２列の列石が確認され、外側（北側）の列石は墳丘端部の列石、内側（南側）の列石は段築の基底部の列石と考えられる。また、１・９トレンチでは１段目と２段目の間の平坦面も確認されテラスと考えられる。

横穴式石室は羨道のみ調査が行われているが、調査により確認できた羨道規模は、少なくとも



第 97 図　鷹塚古墳（1/500）

長さ 6.5m、幅 2.5m、入口側の高さ 2.2m、玄門側の高さ 1.6m を測り、県内最大規模を有する羨道部であることが確認された。石室主軸は墳丘主軸より 6.5°西側に振れている。

鷹塚古墳の築造時期については、1 トレンチで出土した一括遺物から TK209 型式の古相と考えられる。

2　太郎塚古墳（第 98 図）

太郎塚古墳では、3・7・9・11 トレンチで周溝が確認され、径約 23 mの円墳であることが判明した。7 トレンチの周溝底部からは TK43 ～ 209 型式期の須恵器大甕が出土している。主体部は南東方向に開口部を持つ横穴式石室と考えられるが、墳頂部付近の地中レーダー（GPR）探査では反射に強弱が認められ、石室であれば改変を受けている可能性が高い。

築造時期については、出土須恵器から TK43 型式期と考えられる。

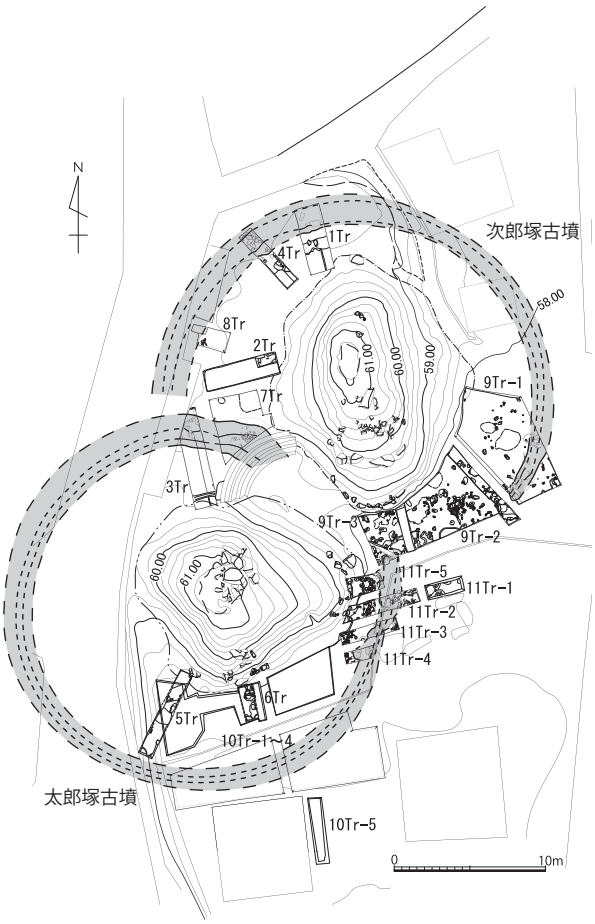
3　次郎塚古墳（第 98 図）

次郎塚古墳では、1・4・9 トレンチで周溝が確認され、径約 24m の円墳であることが判明した。9 トレンチは石室の開口部と考えられる場所に設定され TK43 ～ 209 型式期の須恵器が出土した。

主体部の調査は行われていないが、鷹塚古墳や太郎塚古墳と同様に南東方向に開口部を持つ横穴式石室墳であると考えられる。

築造時期については、出土須恵器から TK43 型式期と考えられる。

次郎塚古墳の墳丘南東側の開口部付近では、平成 20 年（2008）度の調査では国内で生産されたと考えられる馬具（心葉形三葉文鏡板・杏葉）が出土している。また、昭和 33 年（1958）には新羅製と考えられる馬具（心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡・鏡板）も出土している。この馬具は、TK209 型式期頃のものと考えられており、古墳の築造が TK43 型式期と想定されることから、追葬時に副葬されたものと考えられる。これら複数の馬具は、初葬された人物の子弟が都へ上番し活動する中で入手したものと考えられており（桃﨑 2016）、実相寺古墳群と畿内政権との密接な結び付きをうかがわせるものである。



第 98 図　太郎塚古墳・次郎塚古墳（1/500）

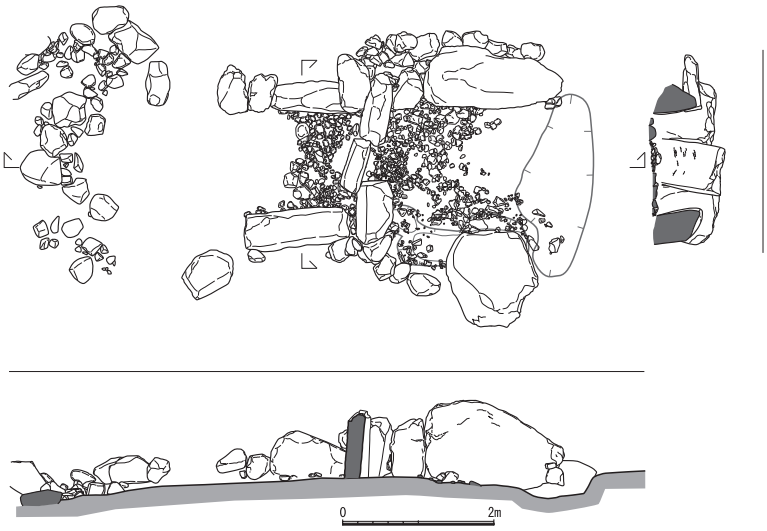
また、太郎塚古墳と次郎塚古墳は、出土遺物から TK43 型式期に立て続けに築造され、確認調査の結果、ほぼ同時期の築造と考えられるが、太郎塚古墳が若干先行する可能性が高いと考えられる。

4　天神畑古墳（第 99 図）

天神畑古墳は、平成２年に行われた発掘調査において発見された古墳である。墳丘はすでに造成により削平されていたが、主体部である横穴式石室の基底部が残存し調査が行われた。

玄室規模は奥壁が石室内側に倒れており正確な規模は不明であるが、奥壁の抜取痕から長さ 2.0m、幅 1.6m を測る小型の長方形プランであると推定され、玄室及び羨道の床面には、小礫が敷き詰められている。

築造時期については、出土須恵器から TK209 型式新相と考えられる。



第 99 図　天神畑古墳（1/100）

5　鬼ノ岩屋１号墳（第 100 図）

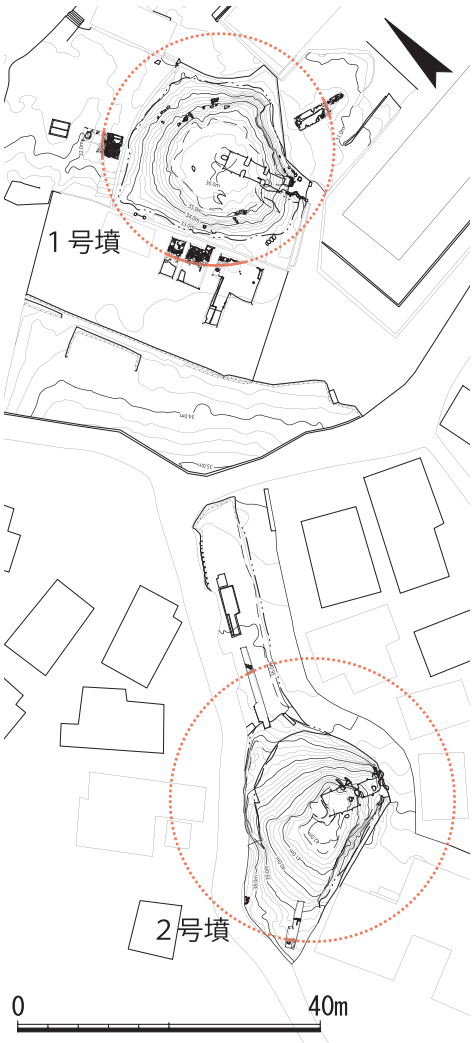
鬼ノ岩屋１号墳の調査では、第１・３・４・５調査区において墳端を確認することができ、直径約 31m の円墳であることが確認された。各調査区より周溝は確認されておらず、周溝は構築されなかった可能性が高いものと考えられる。遺物は後世の撹乱を受けているため良好な出土状況ではないが、墳丘北側の第３調査区から TK209 型式期の須恵器が出土している。主体部は複室構造の横穴式石室で前室側壁や玄門に装飾を持つ。

築造時期については、第３調査区出土遺物及び石室構造から TK209 型式期と考えられる。

6　鬼ノ岩屋２号墳（第 100 図）

鬼ノ岩屋２号墳の調査では、墳丘の北側及び南東側に設定した調査区から墳端と考えられる根石を確認した。第１・２トレンチで確認された根石を基に墳丘を復元すると径約 37.5m の円墳を想定することができ、中心点は石室奥壁上に位置する。主体部は単室構造の横穴式石室出で玄室側壁などに装飾を持つ、玄室規模は長さ 4.1m 幅、3.2m と県内最大規模を誇る。

築造時期については、石室構造から TK43 型式期と考えられている。



第 100 図　鬼ノ岩屋古墳群（1/1000）

第２節　豊後における鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の位置付け

鬼ノ岩屋・実相寺古墳群が所在する別府地区は、大型前方後円墳を築造する国東半島東部と大分や海部の勢力に挟まれ、古墳時代前期から中期にかけて首長墓墳の築造が認められない地域である（第 101 図）。以下、田中裕介氏の論考に依拠しながら豊後における別府地区の古墳時代の動向を概観する（註１）。なお、田中氏は、豊前東部及び豊後を、３つの地域に区分し、第１地帯を宇佐地域から西国東地域、第２地帯を東国東地域から速見地域を経て豊後南部に連なる地帯、第３地帯を日田・玖珠地域としている（田中 2010）。

１　古墳時代前期から中期

別府地区を含む第２地帯は、東国東において「纏向型」の系譜をひく前方後円墳である下原古墳（23m）が築造され、同地域では前期前葉に墳長 120m の前方後円墳である小熊山古墳が出現する。前期末には海部地域の大在地区において墳長 120m の前方後円墳である亀塚古墳が築造される。東国東と海部という豊後最大の前方後円墳を輩出する地域の間にあって別府地区には、首長墓は造られなかったものと考えられる。

中期になると大在地区に亀塚古墳の後継となる墳墓は見出せず、国東半島南端の御塔山古墳（造出付円墳：80m）と新たに臼杵地区に臼塚古墳（前方後円墳：97m）が出現する。

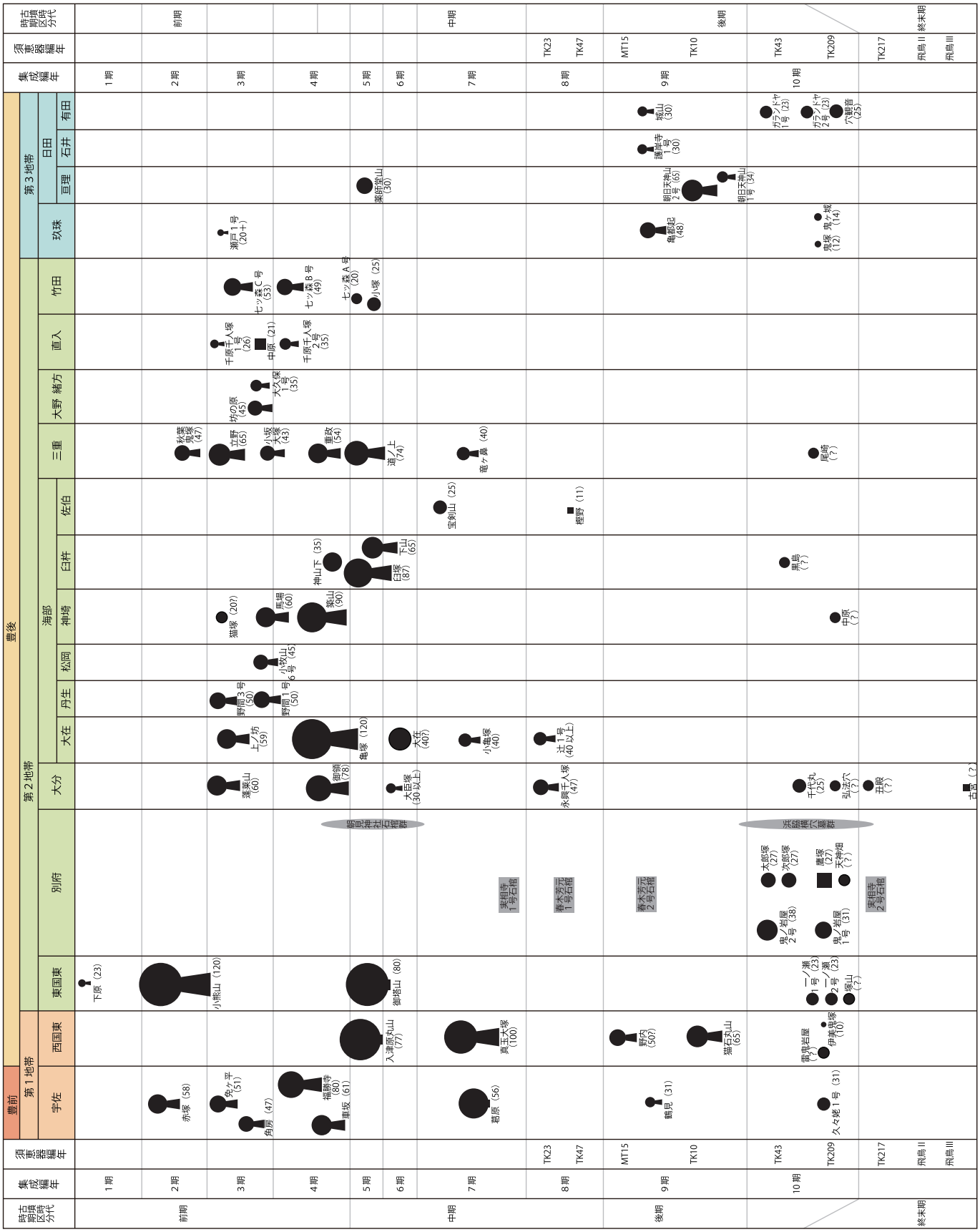
別府南部の朝見神社石棺墓群で確認された石棺群からは三角板革綴短甲が出土し、中期前葉に位置付けられている（西嶋 2014）。広域盟主墳と考えられる臼塚古墳を中心に海部地域においてこの時期同様の短甲の出土が集中することから、朝見神社石棺墓群は臼塚古墳などの広域盟主層と関連する勢力の墓域と考えられる。中期中葉～後葉には、実相寺１号石棺を保持した古墳が築造された可能性があるが、現状では様相は不明である。中期後葉～末には実相寺古墳群から北西（山手側）300 mの位置にある春木芳元遺跡古寺地区において、鉄剣・鉄刀・鉄斧を保持する春木芳元１号石棺が出現し、別府地区に初めて出現した小首長墓になる可能性があると指摘されている（清水 2012）。

２　古墳時代後期から終末期

別府地区を含む第２地域は、中期末の前方後円墳の築造を最後に前方後円墳の築造が停止する。また、後期の前半段階には有力な首長墓は確認されていない。

後期の後半段階になるとそれまで古墳築造の空白地帯であった別府地区において鬼ノ岩屋２号墳が出現する。径 37.5 m前後の大型円墳と考えられるこの古墳の玄室面積は 12.87㎡を測り、同時代の豊後において最大規模の玄室面積を誇る。日田地区のガランドヤ１号墳がこれに続く（図 103）。鬼ノ岩屋２号墳・ガランドヤ１号墳に次ぐ規模のものは玖珠地区の鬼ケ城古墳で、９㎡前後の規模となり玄室規模の開きは大きい。なお、鬼ノ岩屋２号墳の玄室面積の規模は、豊前の甲塚方墳・橘塚古墳・綾塚古墳と同様の規模となる。

鬼ノ岩屋２号墳の出現を契機として、別府地区では、立て続けに古墳の築造が行われる。鬼ノ岩屋古墳群では、TK209 型式期に鬼ノ岩屋１号墳が築造される。実相寺古墳群では、TK43 型式



第 101 図　豊後及び豊前東部における首長墓の変遷

に太郎塚古墳・次郎塚古墳が築造され、TK209 型式期には約 25m の方墳である鷹塚古墳が築造される。この鷹塚古墳は、玄室規模は不明なものの羨道幅 2.5m を測り、鬼ノ岩屋 2 号墳を凌ぐ規模の横穴式石室墳となる可能性が高い。TK209 型式期の新しい段階になると天神畑 1 号墳が築造される。実相寺古代遺跡公園に移設されている実相寺 2 号石棺は、その特徴から TK217 型式期のものとされ（註 2）（田中 2016）、実相寺古墳群における古墳築造は、TK217 型式期まで行われていた可能性が高い。

古墳時代後期後半から終末期にかけての豊後中部～南部（第 2 地帯）は、前期から中期にかけて前方後円墳を築造し首長層を輩出してきた東国東地域や海部地域には有力な首長墳は造られず、三重や竹田などの豊後南部地域でも目立った古墳は造られなくなり、別府地区の鬼ノ岩屋・実相寺古墳群が最大の勢力となる。別府地区と同様な動きを見せるのが大分地区で、後期後半から終末期にかけて千代丸古墳・弘法穴古墳・丑殿古墳などの横穴式石室墳が造られる。7 世紀中葉には大分君恵尺の墳墓と想定されている古宮古墳が築造される。大分地区の古墳群は別府地区の古墳群と直線距離にして約 13㎞と隔絶した距離にあるとは言えず、何らかの関係性を持ちながら存在していた可能性は高い。学史上、大分地区の千代丸古墳・弘法穴古墳・丑殿古墳は、大分君恵尺の墳墓とされる古宮古墳の存在から『国造本紀』に記される「大分国造」の墳墓と目されている。別府地区を含む速見郡は大分国造の領域と考えられているが（西別府 1986）、同領域内の別府地区と大分地区の古墳群を玄室規模で比較すると TK43 型式期では鬼ノ岩屋 2 号墳、TK209 型式期では鷹塚古墳と豊後最大規模の横穴式石室墳を輩出する鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の優位性を認めることができる。田中氏は鬼ノ岩屋 2 号墳と鷹塚古墳を豊後中部～南部（第 2 地帯）の広域盟主墳となる国造級の墳墓と評価し、7 世紀中葉になって古宮古墳が出現し、大分地区の首長墳に盟主首長が移動した可能性を指摘している（田中 2010・田中 2016）。

第 102 図　豊後における玄室規模の比較

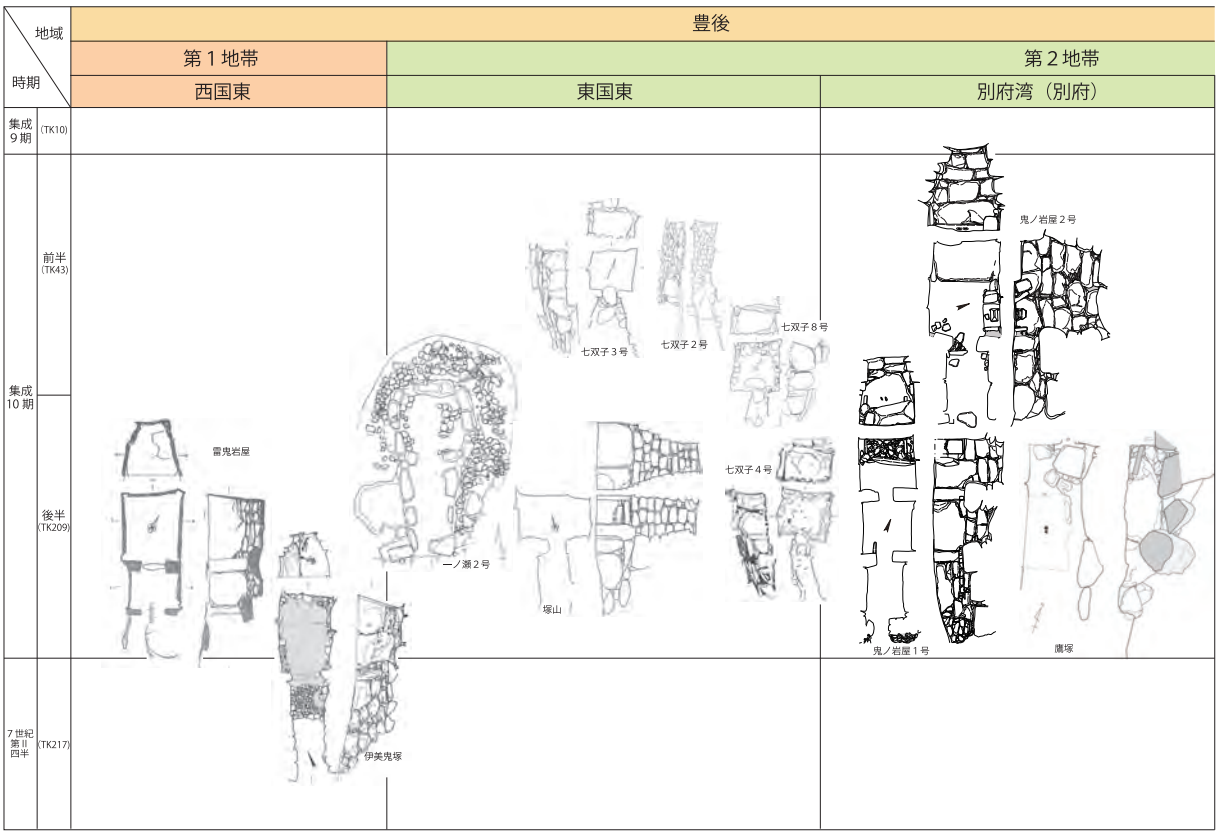
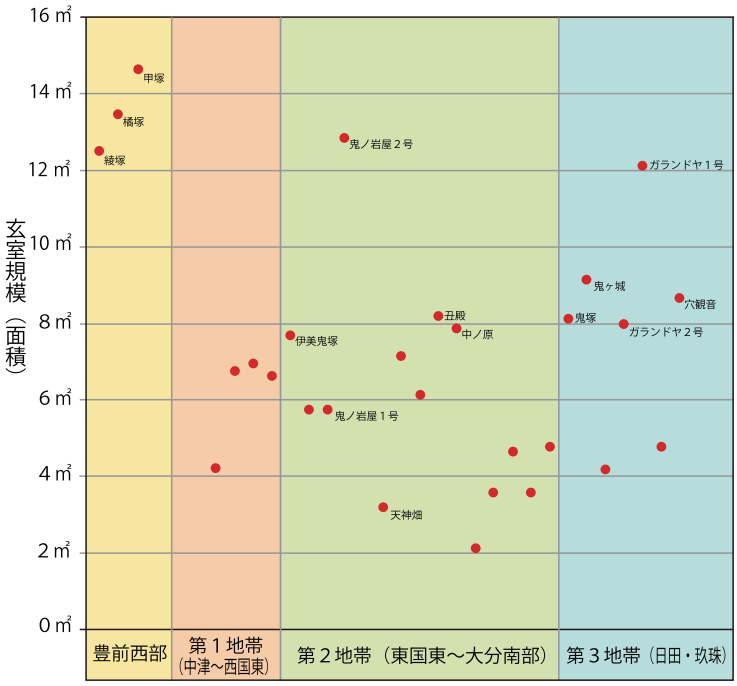


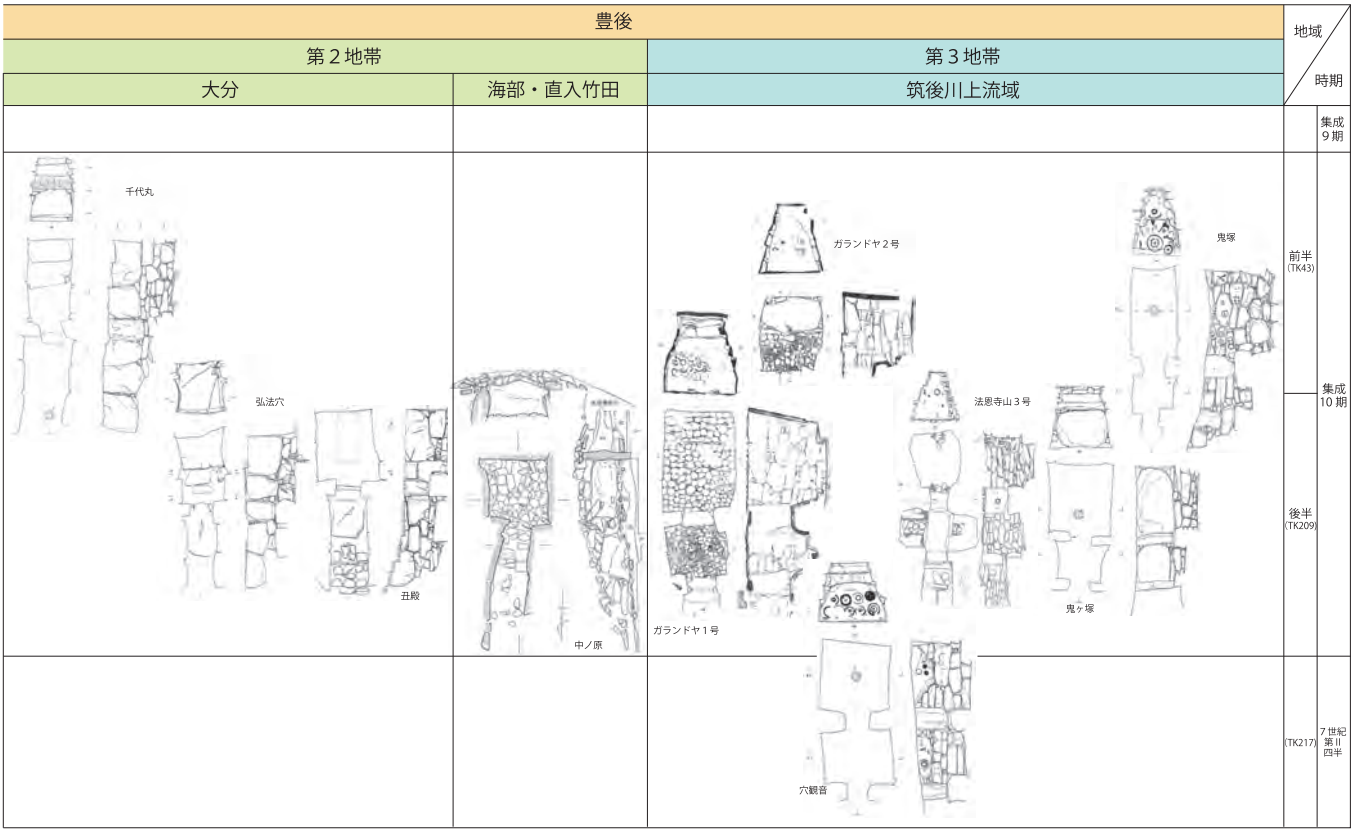
表 11　玄室規模の比較

古墳名称	所在地	時期	玄室長さ（m）	玄室幅（m）	面積（㎡）
綾塚	勝山町中黒田	10期	3.80	3.30	12.54
橋塚	勝山町上黒田	10期	4.15	3.25	13.49
甲塚	豊津町国作	TK43	4.13	3.55	14.66
倉迫二ツ塚1号	中津市三光森山	TK43	2.05	2.05	4.20
相原1号	中津市相原	TK43～TK209	3.38	2.00	6.76
雷鬼岩屋	豊後高田市美和	TK209～TK217	2.90	2.40	6.96
一ノ瀬2号	国東市安岐町	TK209	2.55	2.60	6.63
伊美鬼塚	国東市国見町	TK217	3.35	2.30	7.71
塚山	国東町安岐町	TK209	1.80	3.20	5.76
鬼ノ岩屋1号	別府市北石垣	TK209	2.30	2.50	5.75
鬼ノ岩屋2号	別府市北石垣	TK43	4.15	3.10	12.87
天神畑1号	別府市北石垣	TK209	2.00	1.60	3.20
千代丸	大分市宮苑	TK209	3.75	1.90	7.13
弘法穴	大分市永興	TK209	3.13	1.98	6.20
丑殿	大分市賀来	TK209	3.10	2.65	8.22
中ノ原	佐賀関町関	TK209	2.78	2.85	7.92
七双子2号	杵築市本庄	TK43	2.15	1.00	2.15
七双子3号	杵築市本庄	TK43	1.80	2.00	3.60
七双子8号	杵築市本庄	TK43	2.20	2.10	4.62
七双子5号	杵築市本庄	TK209	1.80	2.00	3.60
七双子4号	杵築市本庄	TK209	2.10	2.28	4.79
鬼塚	玖珠町小田	TK43～TK209	4.05	2.00	8.10
鬼ヶ城	玖珠町帆足	TK209	3.00	3.05	9.15
有田塚ヶ原	日田市有田	TK43	2.15	1.95	4.19
ガランドヤ2号	日田市石井	TK43	3.15	2.52	7.94
ガランドヤ1号	日田市石井	TK209	4.18	2.90	12.12
法恩寺山3号	日田市日高	TK209	2.45	1.95	4.78
穴観音	日田市内河野	TK209～TK217	3.10	2.80	8.68

※玄室長さ・幅の数値は、最大値と最小値の平均値



第 103 図　玄室規模散布図



第３節　東九州における首長墓の動向と鬼ノ岩屋・実相寺古墳群

豊後に隣接する豊前と日向の古墳時代後期後半から終末期（TK43 ～ TK217 型式期）の首長墓の動向を確認し、それぞれの地域で想定されている古墳築造の社会的な背景や被葬者像についても併せて確認する。

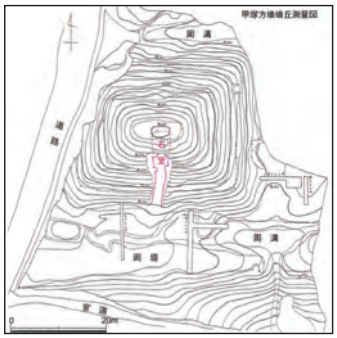
１　豊前地域

豊前地域では TK43 型式期に最後の前方後円墳が築造されたのち、今川流域では TK43 から TK209 型式期に方墳の甲塚方墳（36 m × 46m）が築造され、円墳の彦徳甲塚古墳（径 29m）がこれに後続する。長狭川流域では TK209 型式期に方墳の橘塚古墳（38m × 41m）が築造され、円墳の綾塚古墳（径 41m）が後続して築造される。甲塚方墳は、同時代の天皇陵とも比較しても遜色ない規模を誇り、また、畿内の天皇陵や中央豪族によって採用された墳丘形態である方墳が地方へと拡散する事象では最も早い事例と考えられている（山口 2009）。豊前地域はこれら有力首長墓のほかに竹並横穴墓群など 1000 基を超える横穴群も築造されており、宇野愼敏氏は豊前地域における群集墳を、在地の有力家族層だけでは考えられず「ヤマト政権によって北部九州および西日本から集められた軍事集団に関わる墳墓群」とし、この大規模軍事集団を統活する軍事的指揮権を有する将軍的な役割を担う人物が埋葬された古墳として甲塚方墳や橘塚古墳などの方墳が築かれたと指摘している（宇野 2010）。

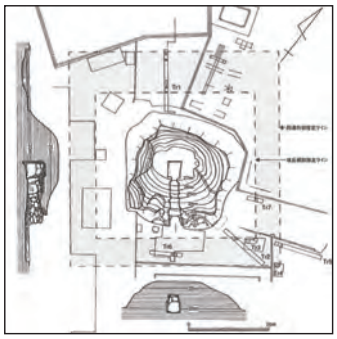
２　日向地域

日向での前方後円墳停止は、TK43 型式期に始まり TK209 型式期にはほぼ築造は停止し、その後の首長墳は大型円墳や方墳へ移行する（今塩屋 2009）。大型円墳は西都原古墳群 206 号墳（鬼の窟古墳）、方墳は新田原 44 号墳、新田原 138 号墳、常心塚古墳、高崎塚原 20 号墳などがある。今塩屋殼行氏は「日向の古墳時代終末期首長墳は、TK209 型式併行期に大型円墳、TK217 型式併行期に大型方墳を採用する」として、大型円墳が直径 20 ～ 40m 超と個体差があるのに対し、方墳は 1 辺 25m 前後と墳丘規模に規格性があり、なんらかの築造規範が存在していたものと指摘されている（今塩屋 2009）。日向における方墳について下原幸裕氏は、「日向国造」や「児湯県主」などの勢力基盤の一ッ瀬川流域に集中する傾向があることから畿内政権と密接に結びついた在地有力豪族の墳墓と考えられている。（下原 2009）。

東九州における前方後円墳築造停止は、その地域内における差異はあるものの概ね TK43 型式期前後とされ、TK209 型式期には首長墓としては大型円墳や方墳へ移行する。鬼ノ岩屋・実相寺古墳群を含む豊後中部～南部は、古墳時代中期末に前方後円墳の築造を停止し（田中 2010）、この傾向は日向における五ヶ瀬川流域や肝属平野の動向に類似する。また、方墳の規模については、豊前では TK43 ～ 209 型式期の甲塚方墳（36m × 46m）と TK209 型式期の橘塚古墳（37m × 39m）が突出し、他の方墳は一辺 10 ～ 15m と小規模なのに対し、日向では一辺 25m 前後と規格性があり、別府地区の鷹塚古墳は一辺 25m 前後の方墳になるものと想定されており、日向における方墳の規格に類似する。



甲塚方墳
（福岡県京都郡みやこ町）



橘塚古墳
（福岡県京都郡みやこ町）

常心塚古墳
（宮崎県西都市）

第 104 図　関連遺跡

第 4 節　鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の歴史的意義

別府の扇状地は、石垣原と呼称されるように地震や大雨による土石流の堆積により田畑の土地はやせて農地に恵まれたとはいえない（入江 1985）。必ずしも平坦地が多いとは言えない別府の扇状地において、古墳時代後期から終末期にかけて豊後最大の古墳群が築造された背景には農業生産力以外の要因も視野に入れ検討する必要がある。

別府地区における古墳時代後期から終末期の古墳群の特徴は、扇状地の北部を流れる春木川を挟んで約 1 ㎞の距離に 2 つの古墳群が存在することである。春木川の北には鬼ノ岩屋古墳群、春木川の南には実相寺古墳群が存在し、2 つの古墳群が併存するような形で大型横穴式石室墳を築造する。

TK43 型式期では、春木川の北側にある鬼ノ岩屋古墳群において、鬼ノ岩屋 2 号墳が築造される。鬼ノ岩屋 2 号墳は単室構造の横穴式石室を持つ径約 37.5m の大型円墳であり、玄室高が 3.7

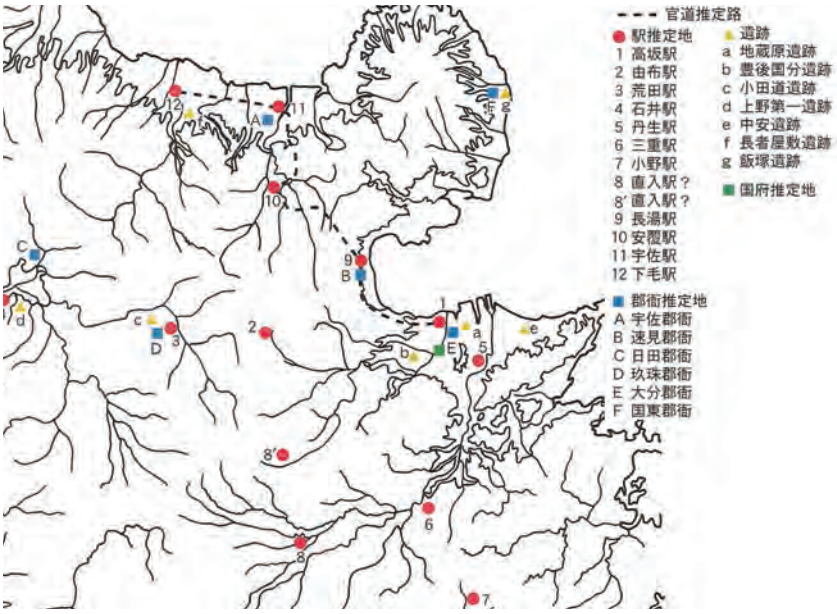
第 105 図　鬼ノ岩屋・実相寺古墳群

mを測る高天井や玄室から羨道の基底石（腰石）に横目地を揃える特徴などが、熊本県氷川町の大野窟古墳を指標とする八代型石室に類似すると指摘され（小嶋 2015）、玄室内部には同心円文や蕨手状の装飾が描かれるなど、筑後地域との繋がりも指摘されている（清水 2003）。また、古墳時代後期後半における豊後最大の玄室規模を誇る大型円墳であることから、国造級の墳墓と評価されている（田中 2016）。

同じ時期、春木川の南側に所在する実相寺古墳群では、太郎塚古墳と次郎塚古墳が築造されている。太郎塚古墳は径約 23m、次郎塚古墳は径約 24m のともに円墳で、隣接するこの 2 つの古墳は時期を違わずに造られたと考えられている。

TK209 型式期になると鬼ノ岩屋古墳群では、鬼ノ岩屋 1 号墳が築造され、豊後中部～南部では唯一の複室構造の横穴式石室を持ち、玄室には石屋形を備える。鬼ノ岩屋 1 号墳の石室構造は熊本県阿蘇市の上御倉古墳と類似し、石室内部には先行する鬼ノ岩屋 2 号墳と同様に前室側面及び玄門に連続山形文などの装飾が描かれる。

同じ時期、実相寺古墳群では鷹塚古墳が築造される。鷹塚古墳は発掘調査の結果、1 辺約 25m 方墳であると確認され、石室は羨道部のみの調査に留まっているものの、その幅は 2.5m を測り、鬼ノ岩屋 2 号墳の羨道幅 1.9m を凌ぐ規模となることが判明した。方墳の規模に関しては、九州では、豊前の甲塚方墳や橘塚古墳に次ぐ規模で、日向の常心塚古墳などと同規模となる（上野 2016）。また、鬼ノ岩屋 2 号墳に続く時期の国造級の墳墓と評価されている（田中 2016）。この鷹塚古墳に後続して TK209 型式期の新しい時期には、天神畑 1 号墳が築造される。また、次郎塚古墳の石室開口部付近からは「新羅の調」「任那の調」にかかる舶載品と考えられる心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡や国内で製造されたと考えられる心葉形三葉文鏡板・杏葉など複数の馬具が出土しており、心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡が TK209 型式期、心葉形変形三葉文杏葉が TK209 ～ TK217 型式期に位置付けられている。これら複数の馬具の存在から、次郎塚古墳に初葬された人物の子弟が、刑部の舎人や瀬戸内航路への中継を担った可能性が指摘され（桃﨑



第 106 図　駅路図（飯沼 2003 より）

2016)、畿内政権との密接な結び付きをうかがわせる。

このほか実相寺古墳群では、出土地不明ではあるが、畿内系家型石棺である実相寺２号石棺が出土している。この家型石棺はTK217型式期ものと考えられ、田中裕介氏の分析によると棺蓋長200～240㎝、幅70～140㎝と推定されており、大分市丑殿古墳の家型石棺（長さ230㎝、幅100㎝）に近い値になると想定されている。これは、福岡県みやこ町綾塚古墳の家型石棺（長さ252㎝、幅144㎝）に比べて小さく、この規模の違いを田中氏は畿内王権中枢からみた政治的位置が反映されたものと想定し、豊後の国造級の古墳である鬼ノ岩屋２号墳と鷹塚古墳の直接の後継墳でありながら、その石棺からみた地位は国造級とはみなしがたい古墳へと変化している可能性が指摘され、TK217型式期以降、国造的地位は大分川流域の勢力へと移動したものと考えられる（田中2016)。

このように別府地区では、TK43型式期には鬼ノ岩屋２号墳と太郎塚古墳・次郎塚古墳が造られ、TK209型式期には鬼ノ岩屋１号墳と鷹塚古墳・天神畑１号墳が造られるなど、春木川を挟んで同時期に併存するように、肥後・筑後的な要素を持つ石室が造られる鬼ノ岩屋古墳群と畿内的との結びつきが認められる実相寺古墳群が造られる。この２つの古墳群の系譜については、築造時期にみる近時性やその属性の違いから、一つの首長系譜により造られたものとするよりも、複数の首長系譜が同時に存在しそれぞれの古墳群を造ったとみるほうが妥当性が高いものと考えられる。なお、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群で認められるような、狭い範囲の中に複数の首長系譜が認められる事例は、古墳時代終末期の瀬戸内海沿岸の中国地方などに認められ（註３）（広瀬2013)、別府地区と至近距離にある大分川流域の古墳群においても同様の可能性が指摘されている（註４）（長2013)。

古墳時代前期から後期前半に至るまで有力な首長墓が築造されなかった別府地区において、後期後半から終末期（TK43～TK209型式期）にかけて県内最大規模の大型横穴式石室墳が造られ、また、複数の首長系譜が存在する可能性がある背景には、いくつかの要因が考えらえるが、一つにはのちに豊前と日向と呼ばれる地域に挟まれた豊後において、別府地区の地理的な重要性が高まった可能性が考えられる。古代の別府には、速見郡衙が設置されその推定地は、鬼ノ岩屋古墳群と実相寺古墳群の中間にあたる北石垣遺跡と推定されている。豊前から豊後へ至る官道は、古墳群を沿うように通り、駅（長湯駅）も別府北部の亀川付近と推定されている（中野1985)。西へは、由布を経由し、玖珠・日田から筑後・肥後へ通じ、東は別府湾に面し瀬戸内海へと通じる（註４）など、古代において別府地区は水陸交通の結節点となっていた可能性が高く、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群が造られ始める古墳時代後期後葉から重要視された可能性が高い。

このような地理的な重要性が高まる背景としては、後期前半に起きた磐井の乱後の畿内政権による九州支配の動向や当時の東アジアの情勢などが要因と考えられ（上野2016)、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の動向は、一地域の首長系譜の問題に帰結するものではなく、畿内政権の政策などと結びついており、律令体制成立前夜の国家形成の一端を示す古墳群であると考えられる。

今後の課題

別府大学文化財研究所による実相寺古墳群の発掘調査成果は、鬼ノ岩屋古墳群の再検討をも促し、古墳時代後期後半から終末期にかけて県内最大規模の大型横穴式石室墳を立て続けに造り出す当地域の古墳群の特性を導き出す結果となった。今後は大分県の古墳時代研究の中でも取り上げられるものと考えられるが、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群に関しては、鷹塚古墳・太郎塚古墳・次郎塚古墳の石室調査や鬼ノ岩屋古墳群の装飾調査など残された課題も多く、引き続き調査を行う必要がある。

また、古墳群の周辺は宅地化が進んでおり適切な保存を行うためには地域住民への理解促進も必要となる。

今後は鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の保存と管理を適切に行うとともに、古墳群を活用した郷土史教育やシンポジウム等を開催するなどして古墳群の周知を図り、別府市の歴史にとって重要な古墳群を次の世代へつなげる取り組みを行っていく予定である。

註

（註１）以下、便宜的に律令制下の国ごとに概観する。

（註２）昭和 51 年（1976）に行われた実相寺古墳群の測量図面の中に、平成２年（1990）に発掘調査が行われた天神畑１号墳のさらに東（古墳群の中で標高が最も低い場所）から過去に石棺が出土したという注記がある。

（註３）広瀬和雄氏は、中央政権によって「もの」と人が結集する水陸交通の重要ポイントに新しい政治センターが設置されたという見解を示めされている。

（註４）長直信氏は、大分市内の古墳を分析するなかで、千代丸古墳－弘法穴古墳という肥後・筑後系の思想を持つ古墳と別系統の石室形態をもつ丑殿古墳が同時存在していた可能性を指摘したうえで、６世紀後半から７世紀前葉頃になって在地勢力下に畿内的な勢力が入り込んだかもしくは取り込んだ実態を反映されると解釈されている。

（註５）奈良時代に編纂された『伊予国風土記 (逸文)』には、伊予道後で倒れた少彦名命を大国主命が、大分速見の湯を下樋を用いて引いて治療したという神話もあり、豊後水道を隔てた交流があったことを物語るものであろう。

引用・参考文献
池邉千太郎 1990「豊前・豊後の横穴墓形態変遷論」『おおいた考古』第３集　大分県考古学会
飯沼賢司 2003「第１節　『豊後国風土記』の世界を読む」『別府市誌』別府市
今塩屋殻行 2009「日向における後・終末期古墳」『終末期古墳の再検討』
第 12 回九州前方後円墳研究会
入江秀利 1985「第三節　農民のくらし」『別府市誌』別府市
上野淳也 2014「鷹塚古墳の時代」『別府史談 No.24』別府史談会
上野淳也 2016「墳丘について」『実相寺古墳群－別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書－』
別府市教育委員会
宇野慎敏 2003「各地の終末期古墳　筑紫」『季刊考古学』第 82 号
宇野慎敏 2010「豊前首長系譜に見る画期と歴史的意義」『九州における首長墓系譜の再検討』
第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨　九州前方後円墳研究会
和田理啓 2010「日向の首長墓系譜」『九州における首長墓系譜の再検討』
第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨　九州前方後円墳研究会
小田富士雄 1979『九州考古学研究　古墳時代篇』

越智淳平 2009「豊後地域における終末期古墳」『終末期古墳の再検討』
第 12 回九州前方後円墳研究会
小嶋篤 2015「古墳時代後期の埋葬施設と墳丘」『古墳時代の地域間交流３』
第 18 回九州前方後円墳研究会
後藤宗俊 1995「豊後における古道と駅制」『風の考古学 4 豊後国風土記の巻』同成社
重藤輝行 2012「九州北部」『古墳出現と展開の地域層　古墳時代の考古学２』同成社
清水宗昭 2003「古墳の世紀」『別府市誌 第 1 巻』別府市
清水宗昭 2012『べっぷの文化財 No.42 －別府市の古墳文化－』別府市教育委員会・別府市文化財保護審議会
下原幸裕 2006「三　九州の終末期方墳」『行橋市史』資料編　原始・古代　行橋市
杉井健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」
『九州における首長墓系譜の再検討』第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会
中野幡能 1985「古代の朝見郷」『別府市誌』別府市役所
田中裕介 1998「前方後円墳の終焉－大分県の場合－」『前方後円墳の終焉』
第 43 回埋蔵文化財研究集会発表要旨　埋蔵文化財研究集会
田中裕介 2010「東九州における首長墓の変遷と性格」
『九州における首長墓系譜の再検討』第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会
田中裕介 2016「実相寺古墳群に所在する二基の石棺について」
『－別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告』別府市教育委員会
玉川剛司 2016「須恵器からみる別府市内の古墳時代の様相」
『実相寺古墳群－別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書－』別府市教育委員会
玉川剛司 2016「別府市内の横穴式石室」
『実相寺古墳群－別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書－』別府市教育委員会
長直信 2008「東九州（豊前・豊後）における後期古墳の再検討」『後期古墳の再検討』
第 11 回九州前方後円墳研究会佐賀大会発表要旨
長直信 2012「豊後地域の諸勢力と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』
九州前方後円墳研究会
広瀬和雄 2013「終末期古墳の歴史的意義　7 世紀の中央政権の地方統治」
『新しい古代国家像のための基礎研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 179 集　国立歴史民俗博物館
福永伸哉 2014「古墳時代と国家形成」『古墳時代の考古学』9 巻 同成社
西嶋剛広 2014「甲冑から見た九州と倭王権との地域間交流」
『古墳時代の地域間交流２』第 17 回九州前方後円墳研究会大分大会　九州前方後円墳研究会
西別府元日 1986「大分君と膳伴公」『大分川流域－自然・社会・教育－』大分大学教育学部
村上久和 1989「第二章古墳時代　第６節古墳文化の終末」『大分県史』先史篇Ⅱ　大分県
桃﨑祐輔 2012「九州の屯倉研究序説」『日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』
桃﨑祐輔 2014「馬具からみた九州の地域間交流－舶載馬具と国産規格馬具に着目して－」
『古墳時代の地域間交流２』第 17 回九州前方後円墳研究会佐賀大会発表要旨
桃﨑祐輔 2016「別府実相寺古墳群出土馬具の検討」
『実相寺古墳群－別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書－』
別府市教育委員会
吉田和彦 2000「大分県の横穴式石室－その階層構造理解について－」『おおいた考古』第 13 集
大分県考古学会

報 告 書 抄 録

ふりがな	じっそうじこふんぐん
書　　名	実相寺古墳群
副書名	別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	別府市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第８集
編著者名	秦 広之・田中裕介・桃﨑祐輔・上野淳也・玉川剛司・奈良文化財研究所
編集機関	別府市教育庁生涯学習課
発行機関	別府市教育委員会
所在地	〒874-8511　別府市上野口町１番15号
発行年月日	平成28（2016）年7月

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
実相寺古墳群	大字北石垣	44202	202043	－	－	H19～H23・H26	－	範囲確認
鬼ノ岩屋古墳群	大字北石垣	44202	202020	－	－	H19～H23	－	範囲確認
春木芳元遺跡	大字北石垣	44202	202043	－	－	H16	－	開発工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
実相寺古墳群	墳墓	古墳	墳丘	須恵器	－
鬼ノ岩屋古墳	墳墓	弥生	墳丘	須恵器	－
春木芳元遺跡	包蔵地	古墳	箱式石棺	鉄剣・鉄刀・須恵器	－

別府市埋蔵文化財発掘調査報告書　第８集

実相寺古墳群

－別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書－

平成 28（2016）年７月

編集・発行　別府市教育委員会
印　　刷　大野印刷株式会社